



日本イェイツ協会

第48回大会 プログラム

2012

10月13日(土) ~ 10月14日(日)

会場
佐賀大学
本庄キャンパス

〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1番地

TEL 0952-28-8113

日本イェイツ協会事務局

〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台1-1
城西大学語学教育センター 小堀研究室内
TEL 049-271-7617 FAX 049-271-7983

● 交通案内 <大会は本庄キャンパス>

佐賀駅バスセンターからバスで約 20 分

「4番のりば」から市営バス11番<相応行> 又は12番<東与賀行>で「佐大前」

10月13日(土)

於 教養教育運営機構 2号館

9:30~10:30 受付

10:30~11:00 挨拶 (2号館 211番教室)

日本イエイツ協会会長 松村 賢一
佐賀大学副学長 瀬口 晶洋氏
アイルランド大使 John Neary 氏
司会 小堀 隆司

11:00~12:00 【講演】 (2号館 211番教室)

私のイギリス発見、ふたたび 虎岩 正純
司会 海老澤邦江

12:00~13:00 昼食 (2号館 215番教室)

総会 司会 浅井 雅志

13:00~14:30 【研究発表】 (2号館 211番教室)

1. ヒュームからイエイツへ — 鍛冶されるビザンティン美術 宮本 大介
2. 'Ego Dominus Tuus' — 詩になった詩論 三宅 伸枝
3. 奇妙な二つの対立物—William Blake の 'The Mental Traveller' を読む
星野恵里子
司会 池田 寛子

14:40~17:30 【シンポジウム】 (2号館 211番教室)

A Vision を味読する法

司会・構成 伊里 松俊
小堀 隆司
谷川 冬二
伊東 裕起

18:00~20:00 情報交換会 (会場 café TRES)

司会 木原 誠氏

10月14日(日)

於 教養教育運営機構 2号館

10:30~12:00 研究発表 (2号館 211番教室)

1. イエイツと「喜悦」を産む「魂」 尾澤 愛子
2. グレゴリー夫人『月の出』の一考察 河野 賢司
3. イエイツの薔薇の詩をめぐって — 薔薇はどこへ行ったか?
木村 俊幸
司会 奥田 良二

12:00~13:00 昼食 (2号館 215番教室)

13:00~15:40 【ワークショップ】 (2号館 211番教室)

イエイツの 'The Second Coming' を読み解く

司会・構成 佐藤 容子
萩原 眞一
柿原 妙子

15:50 閉会の辞

松田 誠思

ヒュームからイエイツへ—鍛冶されるビザンティン美術

宮本 大介

多くの論者が様々な側面から指摘する事から明らかなように、イエイツ作品は様々な思想の影響を受けて紡ぎだされたものである。本発表は、まずはこれまであまり言及される事のなかった、イエイツの芸術思想の「一つの源流」としてのヒューム (T. E. Hulme, 1883-1917) の影響を指摘してみたい。その上で、影響が見受けられるはずのヒュームの提示する美術論と食い違う、イエイツにおけるビザンティン美術観の特異性から、背理的にイエイツのビザンティウム像が中世アイルランドにおけるケルト美術を指しているのだという事を指摘したい。本発表で主に俎上に載せる作品は、イエイツのビザンティウム詩作群、そして散文作品『幻想録』である。

イエイツの芸術思想のヒントとなったものとして、イエイツの同時代人であり、イマジズムの運動家であったヒュームの影響を指摘する論は殆ど見られない。しかし1924年に出版されたヒュームの著作 *Speculations* 『思索集』に対するイエイツの傾倒を見るに、その影響は少なからずあるはずだ。実際、イエイツの手法であるアルカイックな世界観から新時代の精神を打ち立てようとする企みは、ヒュームの『思索集』に見て取れる。後期の詩「人とこだま」における「厳かな岩の顔」はヒュームが論じるエジプト美術論のスフィンクスそのものである。『思索集』に展開される様々なヒューム芸術論の白眉はそのビザンティン美術論で、今日のそれに対する評価を決定づけるものといえる。イエイツがヒュームから大きな影響を受けているのであれば、ヒュームの『思索集』出版後にイエイツが生み出したビザンティウム詩作群、或いは『幻想録』中のビザンティン美術観にも当然、直接的影響が見られるはずだ。だがビザンティン美術を語る時のイエイツの言葉はヒュームの挙げるビザンティン美術の特徴と食い違っており、その特徴はむしろケルト的である。本発表では実際に画像を用いてその違いを見ていきたい。

‘Ego Dominus Tuus’ — 詩になった詩論

三宅 伸枝

‘Ego Dominus Tuus’ は詩論としても読めるのではないか。詩とは何か、詩に到達するまでに何が起こるのか。あるいはイエイツは詩を最終の到達目標だと思っていたかどうかということまで作品から見えてくるかもしれない。

形式は二者の対話で、この二者は一見別人格としての二者に見えながら、同一人格中の二者かもしれない。二人の主張に耳を傾けてみると、いわゆる近代と近代以降における詩の創造と批評が問題となっているのがわかる。イエイツはこのことをどのように捉えているのであろうか。果たしてその問題に彼独自の決着を見出したのか、それとも見出していないのか。‘an image’あるいは‘these characters’を引き合いに出して詩中人物に語らせるイエイツが詩作の抛り処としたのは結局何であったのだろうか。こういったことが詩になっているという事実は読み手に何らかの示唆を与えているように思われる。

以上の点に注目しながら、‘Ego Dominus Tuus’ を詩として成立させているイエイツの詩論と詩の方法について考えてみたい。

奇妙な二つの対立物 — William Blake の ‘The Mental Traveller’ を読む

星野 恵里子

『ヴェイラ、もしくは四人のゾア』(Vala, or The Four Zoas, 1795-1804) 執筆中の作品である William Blake の「精神の旅人」(‘The Mental Traveller’, 1801-02) は、長さにしておよそ 100 行ほどではあるが、そこには奇妙な出来事が語られている。中心となるのは男女の老人と赤子であるが、たとえば、男の赤子が老婆の手に預けられることで、エピソードが進行する。赤子が成長するとともに老婆は若返り、それとともに男の赤子は成長し、やがて老人となるのだが、彼のもとに女の赤子が誕生する。作者は最後の一行の ‘And all is done as I have told.’ という言葉で、この奇妙な出来事が延々と繰り返されることをほのめかす。すなわち、女の赤子が成長するとともに、老人となった男は若返るのである。ブレイクがこのように奇妙な二つの対立物を表現した背景にはどのような思想があるのであろうか。そして、その思想が、イエイツが事あるごとに本作品に言及するその背景にいかにか影響を与えたのか、という点を考察する。

＜ *A Vision* を味読する法 ＞

「存在の統一」と月の諸相にみるロマン派詩人論

司会・構成 伊里 松俊

イエイツは *A Vision* が「詩への隠喩」を与えてくれるものと述べたが、同作品は後期の詩へのイメージの格納庫ではなかった。そこには詩人の作家論が表れているのである。イエイツは *A Vision* の「二十八の顕現態」において文学者を中心に、思想家、芸術家、歴史的人物などの類型化を試みている。

従来の英国ロマン派詩人研究においては、ワーズワス、キーツは「自然化された想像力」、ブレイク、シェリーは「幻想的な想像力」を特徴とすると見做され、両グループの詩人の詩作品には大きな違いがあると考えられてきた。しかし、イエイツの「二十八の顕現態」に従えば、これらの詩人は完全な「存在の統一」が可能な第十五相を挟んでその前後に分類され、彼らの想像力世界は夫々さほど異種なるものではないように表わされている。つまり、これらの詩人は、満月の層を挟んで、「ロマン派詩人」と括られることが可能であるということである。また、イエイツは自らをシェリー、ダンテと同じ第十七の相に属すると考えたようであるが、そこには、世紀末詩人を通り抜けて、自分をロマン派の流れに結び付けようとする意図が汲み取られる。

しかし、果たしてキーツはワーズワスと同じ相に入ると考えることは可能であろうか？彼はワーズワスを「自己中心主義的崇高」の持ち主として批判し、「否定的能力」を持つシェイクスピアに憧れていたからだ。また、時代的には「ミメシス」の原理に基づいて創作したシェイクスピアを「反対的」な、自己表現的である位相に置くのも、ロマン派詩の読者には理解し難いように見える。*A Vision* におけるイエイツの議論は「論理的というよりも感情的である」(V. Moore) といえるかもしれない。

本発表では、これらロマン派詩人の詩のイメージを点検することにより、不明瞭な「存在の統一」というテーマに迫ってみたい。彼らの存在の相はイエイツによる詩の理解をとおして決定されており、そこにはイエイツの解釈、詩人論が表れている。「存在の統一」という自我は彼らの詩ではどのように表れているのだろうか。私たちは彼らの詩では詩的ヴィジョンの「統一」が危うくも保持されている姿や破壊されている事実を認めることになるだろう。

扱う予定の詩：Wordsworth, 'Tintern Abbey', Keats, 'To Autumn', Yeats, 'In Memory of Major Robert Gregory'.

「その両極的思考の構図」

小堀 隆司

A Vision の大きな根幹となっている Four Faculties および Four Principles は、周知のように対を成す二項が同じく対を成す二項とさらに対を成すという四肢構造を設けている。前者においては Will と Mask の二項、Creative Mind と Body of Fate の二項が複雑に対を成しながら人間の生の類型化を試みているが、この<対>という言葉はどのような意味を有しているのか。すぐに<二項対立>、<二律背反>が思い浮かぶように<対>からは<対立>という意味が浮上してくると思われる。確かに Will と Mask の関係は、Creative Mind と Body of Fate も同様に対立項としてあり、さらに“Will と Mask”は、“Creative Mind と Body of Fate”のそれと対立の関係にある。改めるまでもなく前者の二項をイエイツは Subjectivity, Antithetical と、後者のそれを Objectivity, Primary と規定するが、そこには明らかに対立の構図が窺える。しかし、たとえば The Great Wheel、第二部 Examination of the Wheel の第十節のタイトル Discords, Oppositions and Contrasts が暗示するように、こうした<対>はもっぱら<対立>に終わることはない。

イエイツの対概念としての二項は対立と類似を同時に取り込む射程を持っている。換言すれば、ときには対立の状態を帯び、ときには類似した状態、またときには対立とも類似ともとれる状態を帯びている。単に対立に終わらない二項の対概念をもって、イエイツの言うなれば両極的思考がどのような生の空間を創り出しているのか、*A Vision* を通してそれを探してみたい。

A Vision に見るイエイツの歴史記述について

谷川 冬二

1925年私家版としてプリントされた *A Vision* の第一書 *What the Caliph Partly Learned* を閉じているのはセンタリングされた次の二行

Finished at Thoor, Ballylee, 1922,
in a time of Civil War

であり、これらは（読点ひとつを除いて）1937年版でも削られることなくその第一書 *The Great Wheel* を閉じている。このことから、アイルランドの内戦、その後の分裂という現実をどのように理解するか、が *A Vision* における歴史記述の要点ではないかという仮説を立ててみる。イエイツにとってこの現実が大変重かったことが、1920年にオックスフォードで書かれた ‘*All Souls’ Night*’ が、25年版同様に、しかし、*An Epilogue* という副題を加えられて37年版の掉尾に置かれていることから察せられる。あるいは、*The Historical Cones* に引かれている意味深な太線の位置を考えあわせても良いだろう。

神秘主義やオカルト哲学等の省察から逃げて、‘*The Phases of the Moon*’ や ‘*Leda*’、また前記 ‘*All Souls’ Night*’ を、*A Vision* の読者が共有しているであろう創作時の背景を踏まえて読む、という作業に事を卑小化する気がしないではない。が、そもそもこのシンポジウムの出発点が「*A Vision* の記述をテキストを読むというアプローチで」というところにあったと理解している。たしかに、二種類のテキストと辞書だけで、わからないことだらけの *A Vision* から問いを引き出して、仮の答えを提示して見るのも無駄ではないと思う。たとえば、例の二十八相も、1925年版では *embodiments*、1937年版では *incarnations* とされている。この書き換えを単なる言い換えとして済ませてよいのかどうか。小さなことにこだわってみたい。

存在の矛盾を見つめるまなざし：*A Vision*におけるイエイツの葛藤の詩学

伊東 裕起

イエイツはなぜ *A Vision* を書こうとしたのか。なぜ、書かずにはいられなかったのか。まずはこのことについて少し考えてみたい。イエイツの *A Vision* の執筆のきっかけに関しては、1937年版の第二版で記された、妻ジョージの「自動筆記」が挙げられる。(Harpersらによる「自動筆記」マニュスクリプトの解析や Ann Saddlemyer によるジョージの伝記研究などによって、この「自動筆記」に関しても様々な説が挙げられている。)しかし、この「自動筆記」に目を奪われるあまり、なぜイエイツが *A Vision* を書こうと思ったのか、その動機が見落とされているように感じられる。妻の「自動筆記」がどれだけ衝撃的だったとしても、*A Vision* を書くということの必然性には直接的にはつながらないからだ。

イエイツを *A Vision* の執筆に駆り立てたもの、それは彼の「存在の統合」(“Unity of Being”)の探求だったとよく言われる。しかし、*A Vision* のテキスト、特に最も早い段階で完成した部分である“The Great Wheel”で表されているのは「存在の統合」そのものであるよりむしろ、矛盾した存在である人間の心理学的考察である。もちろん“The Great Wheel”においても“Unity of Being”は言及されており、重要な概念として扱われている。イエイツの思想において重要な「仮面」(“Mask”)も重要な概念として扱われているが、それは「四つの機能」(“Four Faculties”)に組み込まれた形で説明される。しかもその「仮面」も *A Vision* においては「真の仮面」(“True Mask”)と「偽の仮面」(“False Mask”)があると説明される。イエイツの仮面理論自体もそうであるが、*A Vision* において繰り広げられる「四つの機能」を用いた人間論は、「存在の統合」に到れない人間の存在の矛盾を見つめるまなざしである。

A Vision の思想圏を先取りする作品 *Per Amica Silentia Lunae* においてイエイツは “We make out of the quarrel with others, rhetoric, but of the quarrel with ourselves, poetry.” と書いたように、イエイツはそのような人間の存在の矛盾を葛藤と捉え、詩の源泉としていた。本シンポジウムでは、私は浅学ながら、*A Vision* の “The Great Wheel” を読み解くとともに、関連詩群を読み解くことでイエイツの葛藤の詩学に迫りたいと考えている。

イエイツ — 「喜悅」を産む「魂」

尾澤 愛子

詩人イエイツは、「喜悅」(joy / delight)と「悲哀」(sorrow / grief)を産む「魂」(soul)の働きを重視し、これを追求し形成することを芸術活動の大事な目標とした。それは全作品の核となっていると言ってよい。

初期において、イニスフリー湖島に寄せる波の音を「心」(heart)の奥底で聞くことに喜びと安らぎを感じるが、長い犠牲が続くと「心」は「石」になると嘆く詩人である。中期では、たとえば‘Sailing to Byzantium’のなかで、「肉体」に結び付いている「心」を捨てて、芸術活動によって「魂」を満足させることを熱望する。spiritualでintellectualな「魂」を求めて、内面的世界から外面的世界へと転じ、自己の変容を決意する。「自我」と「魂」を対峙させ、対話する。「至福」の幸福感に満たされ「喜悅」を他人に与えることができる。後期においては、‘tragic joy’のなかで笑う。その笑いは「冷たい視線」を伴って「生と死」に投げかけられ「希望の喜び」を産む。詩‘An Irish Airman Foresees his Death’で、彼は「孤独を悦びとする衝動」(a lonely impulse of delight)に駆られる。神秘的な「喜悅」の「魂」は「死から新しい生」を産む。「喜悅」は「美しい無垢の魂」から生まれ、「魂」は自らを知る。それは「天の意志」であり、Blakeの魂の「無限と永遠」観と一致する。

「魂の永遠不滅」は、イエイツの一貫した信念であり死生観である。‘the singing-masters of my soul’を求めて肉体から離れた「魂」は「動搖」(vacillation)をしながら魂を形成する。精神的で知的な「喜悅」を産む「魂」の軌跡はイエイツの全芸術活動そのものであり、「魂」は全芸術作品の「核」であり「真髓」である。

本発表では「喜悅」を産む「魂」に焦点をしぼって、それがどういう特色を持っているのかをいくつかの作品に即して論証してみたい。

グレゴリー夫人『月の出』の一考察

河野 賢司

グレゴリー夫人 (Lady Augusta Gregory, 1859-1932) の 1 幕劇『月の出』 (*The Rising of the Moon*, 1907 年 3 月 17 日初演) は、脱獄囚の歌う愛国歌に旧きナショナリズムを揺さぶられ、警察官としての職務への忠誠心との板挟みになる巡査部長の葛藤を描く佳品である。

指名手配書の没個性にこめられた反逆者像の普遍性、脱獄においても逃走においてもけっして無慈悲な暴力に訴えない自制心、歌とその歌詞の力によって理性的判断を屈服させる展開に見られる「ことば」への強い信頼感を確認したうえで、この翻意劇が成立するには、脱獄囚と巡査部長がアイルランドの口承伝統文化や歴史観を共有していることが前提となること、換言すれば、劇中でじっさいに歌われ、あるいは言及されるバラッド曲への理解と愛着の共通体験がなければ、この作品の説得力は十分に伝わらないことを指摘したい。あわせて、ジョン・フォード監督による同名タイトルの映画化 (1957 年) において、付け加えられた脱獄時のエピソード場面を含む原作との異同についても分析し、その効果や意図を検討する。

W.B. イェイツの薔薇の詩をめぐって — 薔薇はどこに行ったか？

木村 俊幸

イェイツの‘The Song of the Happy Shepherd’は、かつて詩人に豊かなインスピレーションを提供していた「アルカディアの森」や「牧羊神」に象徴される、今や失われた神話的世界を、言葉の力、あるいはイマジネーションの力によって再び構築しようという決意をうたった、詩人としてのイェイツのその後の方向を決定したと言ってもいい記念碑的な作品である。その構築の意志は *The Wanderings of Oisín*、*The Celtic Twilight*、*Cathleen ni Houlihan* など、主にケルトの神話や民話や伝承を題材にした作品となって具体化するわけだが、これらの作品に通底するものは、アイルランドを伝統と誇りある独立国にふさわしい文化国家にするために必要な、国民を統合すると同時に、国民によって共有される〈大いなる物語〉を創造しようというイェイツの堅固な信念に他ならない。

初期のイェイツが薔薇 (Rose) を象徴 (symbol) として多用するのもこれと同じ理屈である。古代ギリシア・ローマ時代において愛と美の女神アフロディーテ (ヴィーナス) に捧げられた花であり、さらにヨーロッパの中世において「神秘の薔薇」として聖母マリアの純潔を象徴する花であった薔薇は、その多様な象徴性ゆえに、ヘリックやバーンズやブレイクなどをはじめとする多くの詩人によってうたわれてきた。薔薇は〈大いなる物語〉であり、集団の記憶そのものである。

イェイツは詩集 *The Rose* (1893) や *The Wind among the Reeds* (1899) に収録された、薔薇を主題としたいくつかの詩において、もともと豊かな象徴性の備わった薔薇をさまざまな文脈においてうたうことで、この花にさらに新たな象徴性、あるいは物語性を付与しているのだが、*The Wind among the Reeds* を最後に、復活祭蜂起後に書かれた‘The Rose Tree’を例外として、薔薇は、詩の主題として正面切って取り上げられることも、また言及されることもほとんどなかった。なぜだろうか。本発表では、その理由について様々な角度から検討することによって、イェイツの詩における薔薇の行方を探してみたい。

＜イエイツの ‘The Second Coming’ を読み解く＞

司会・構成 佐藤 容子

本ワークショップにおいては、イエイツの ‘The Second Coming’ を多様な角度から読み解く契機となることを目指したい。ワークショップの発表者は、問題提起を行うことをその主たる役割とし、フロアからの活発な議論と参加を期待するものである。

発表者の萩原氏は、主として ‘The Second Coming’ における「時間構造」に注目してこの詩の分析を行い、柿原氏はこの詩の最後の言葉がもたらす「誕生」の比喩に焦点をあてて、それぞれアプローチを試みる予定である。

お二方の発表に加えて、私は ‘The Second Coming’ にみられる「サウンド・シンボリズム」に関して言及したいと考えている。‘The Second Coming’ は、‘Leda and the Swan’ と並んで、歴史と文明の転換を幻視する詩としてイエイツの象徴体系と深い関連を持っている。イエイツが世界の表象として用いる互いに咬みあう二つの円錐が一方の極に達し、まさに反転しようとする瞬間の表出は、‘The Second Coming’ の頭韻構造によっても劇的に表現されていると思われる。

イエイツの他の詩また劇作の分析に基づき、私は、イエイツのいう「始原性」の力は、基本的に /f/ 音によって表象される一方、「対抗性」の力は、基本的に /b/ 音によって表象されると共に、両極を揺れ動く領域に /w/ 音、/g/ 音、/d/ 音また /s/ 音が現れると考えてきた。‘The Second Coming’ においても、冒頭の「鷹」のイメージに関連して ‘falcon’, ‘falconer’, ‘fall’ と /f/ 音の連鎖が続いたところへ「血で濁った潮」(‘blood-dimmed tide’) の /b/ 音が衝突し、最後の二行における ‘beast’, ‘Bethlehem’, ‘born’ の /b/ 音の連鎖に展開していくのである。/b/ 音の連鎖が示す新たな文明の誕生の予感に至る過程で、最も特徴的に多用されている頭韻は /s/ 音によるものだ。/s/ 音あるいは /sh/ 音の多用は、劇作では *The Death of Cuchulain* などにも見られたが、‘The Second Coming’ においては、詩人が己の幻視を確信する ‘Surely’ という言葉に始まって /s/ 音の連鎖が加速していく過程について考察したい。また、この /s/ 音は、そもそもこの詩のタイトル中の言葉である ‘Second’ に内包されていた音であったことに注目したい。

‘The Second Coming’ の時間構造

萩原 真一

イエイツは *A Vision* において、世紀末から長年親しんできた円環的な時間構造を、咬合する円錐が間断なく交替し続ける螺旋的な時間構造として捉え直した。詩 ‘The Second Coming’ (1919) の冒頭2行では、原初的な円錐が拡大の極に、反定立的な円錐が収斂の極に達したため、両者が今まさに逆転しようとする危機的な状況を、鷹の描く飛跡によって鮮やかに形象化している。詩の後半、この危機的な状況を打開すべく登場するのが、「新しいベツレヘム」に向かって這い寄っているスフィンクスめいた怪物である。「再臨」とは、『ヨハネ黙示録』によると、キリストがみずから一千年間の地上楽園を実現するために、最後の審判に先だって、地上に降り立つことを指すが、詩人は「再臨」を<荒き獣>という反キリストの到来という形でしか思い描けなかったようだ。世紀末のある日、Alfred Jarry の *Ubu Roi* の初演に立ち会い、破天荒な主人公の内にいっさいを破壊する<兇暴な神>が顕現するのを目撃したイエイツは、第1次大戦後の「すべてがばらばらになった」終末的な状況下、<荒き獣>に身をやつした<兇暴な神>が「再臨」するのを幻視しているのである。しかも、<荒き獣>のもたらす世界の終末は、『幻想録』の歴史哲学体系によって、イエイツの円環状の時間構造の中に完全に組み込まれ、歴史上たえず周期的に生じる終末に他ならない。

こうして ‘The Second Coming’ では、ヘレニズムに起源をもつ円環的な時間構造が表層的には前面に躍り出ているものの、その背後にはヘブライズムに起源をもつ直線的な時間構造が伏在しているように思われる。そこでワークショップの発表においては、2つの相異なる時間構造が ‘The Second Coming’ において陰に陽に交差している模様を、初期の ‘The Valley of the Black Pig’ (1896) や後期の ‘The Gyres’ (1936-37) などを視野に収めながら捉えると共に、イエイツの終末意識の一端を検討してみたい。

イエイツと〈誕生〉

柿原 妙子

‘The Second Coming’は空を旋回する鷹で始まりベツレヘムに向かって歩む“rough beast”の姿で終わる。作品の最終的なフォーカスは最後の言葉“to be born”即ち〈誕生〉にあるといえよう。イエイツの妻ジョージが当時長女を妊娠中だったことはこの作品執筆に関係があると考えられている。また長女の誕生直後に書かれた‘A Prayer for My Daughter’でも揺りかごの赤ん坊が焦点となり、それを取り囲む荒々しい現実世界が描かれている。新しい時代の到来を〈誕生〉の比喻で表わすのは特にイエイツに限ったことではないが、イエイツ作品における誕生は、始まりを意味する観念的な表象というよりもむしろ生物的な出来事そのものであるのが特徴だ。もちろん作品に現われるのは自身の子供の誕生に限らない。‘Easter 1916’、‘Leda and Swan’、‘Among School Children’、*Purgatory*など生殖・出産・誕生が関わる作品は実に多く、それらには新しく来るものへの期待や失望、また状況が大きく変化することに対する不安や恐怖が表現される。今回のワークショップでは、関連するイエイツ作品や影響を与えたと思われるブレイクやモリスの作品に注意しながら、新しい時代への転回と生物的な誕生がイエイツの中でどのように結びついていたのかを考えてみたい。

日本イエイツ協会

第48回大会
要 旨